

とらますく presents

英語・数学勉強法

とらますく(佐藤知宏) 著

※この文書を、著者の許可なく不正使用することを固く禁じます

<p>【導入】</p> <p><u>前書き：プロローグ</u></p> <p><u>第一章：手法理論の確認</u></p> <p>勉強手法の理論</p> <p>勉強法 x 軸</p> <p>勉強法 y 軸</p> <p>【英語】</p> <p><u>第二章：英語という科目</u></p> <p>英語の勉強</p> <p>英語勉強の構造</p> <p>英語習熟の段階</p> <p>見据えるべきゴール</p> <p>英語勉強のアプローチ</p> <p>クラシック型アプローチ</p> <p>ネイティブ型アプローチ</p> <p>本書のスタンス</p> <p><u>第三章：英語勉強法モデル</u></p> <p>英語勉強のモデル</p> <p><u>第四章：語彙</u></p> <p>語彙学習の目標</p> <p>教材の基本設定</p> <p>上級レベルの設定</p> <p>質的な目標</p> <p>語彙学習のポイント</p> <p>あきらめが肝心</p> <p>教材選択の妙</p> <p>注意を向ける手法</p> <p>精緻化による手法</p> <p>語彙学習の進め方</p> <p><u>第五章：文法</u></p> <p>文法学習の目標</p> <p>教材の基本設定</p> <p>質的な目標</p> <p>文法学習のポイント</p> <p>理解における注意点</p>	<p>上手な理解のしかた</p> <p><u>文法学習の進め方</u></p> <p>理解そして実戦</p> <p>基本英文集の暗唱</p> <p><u>第六章：基本英文集</u></p> <p><u>基本英文集における目標</u></p> <p>教材の基本設定 1</p> <p>教材の基本設定 2</p> <p>質的な目標 1</p> <p>質的な目標 2</p> <p><u>基本英文集のポイント</u></p> <p>目的の意識</p> <p>各段階におけるコツ</p> <p><u>基本英文集の進め方</u></p> <p><u>第七章：文法・語彙系問題</u></p> <p><u>文法・語彙系問題演習における目標</u></p> <p>教材の基本設定</p> <p>質的な目標</p> <p><u>文法・語彙系問題演習におけるポイント</u></p> <p><u>文法・語彙系問題演習の進め方</u></p> <p><u>第八章：英和変換系問題</u></p> <p><u>英和変換系問題演習における目標</u></p> <p>教材の基本設定</p> <p>質的な目標</p> <p><u>英和変換系問題演習におけるポイント 1～</u></p> <p><u>英和変換の構造～</u></p> <p>英和変換の構造</p> <p>和訳する</p> <p>英語のまま理解する</p> <p>英語の順に従って日本語で考える</p> <p><u>英和変換系問題演習におけるポイント 2～</u></p> <p><u>国語ができるか～</u></p> <p>国語の重要性</p> <p>文のまとまりごとに、自分なりに噛み砕く</p> <p>文章全体の流れや論理構築を捉える</p>
--	---

<p><u>英和変換系問題演習におけるポイント3～</u> <u>読み方の作法～</u> 読み方の作法 わからない部分の対処法 作法における注意点 <u>英和変換系問題演習の進め方</u></p> <p>第九章：和英変換系問題 <u>和英変換系問題演習における目標</u> 教材の基本設定 質的な目標 <u>和英変換系問題演習におけるポイント1～</u> <u>和英変換の構造～</u> 日本語を英訳する 英借文 <u>和英変換系問題演習におけるポイント2～</u> <u>国語ができるか～</u> <u>和英変換系問題演習におけるポイント3～</u> <u>書き方の作法～</u> 英文のパーツを意識する 失点しない文を心掛ける <u>和英変換系問題演習の進め方</u></p> <p>第十章：コミュニケーション系問題 <u>コミュニケーション系問題の概要</u> <u>リスニング</u> リスニング学習の目標 リスニング学習のポイント リスニング学習の進め方 <u>スピーキング</u> スピーキング学習の目標 スピーキング学習のポイント スピーキング学習の進め方</p> <p>第十一章：英語総まとめ <u>英語勉強法の概観</u> <u>教材設定の具体例</u></p>	<p>【数学】 第十二章：数学という科目 <u>数学の勉強</u> <u>数学勉強の構造</u> ステップアップの段階 アプローチのバリエーション</p> <p>第十三章：数学勉強法モデル <u>数学勉強のモデル</u></p> <p>第十四章：数学的ルール <u>数学的ルール学習の目標</u> <u>数学的ルール学習のポイント</u> <u>数学的ルール学習の進め方</u></p> <p>第十五章：典型例題 <u>典型例題学習の目標</u> <u>典型例題学習のポイント</u> 典型例題の位置づけ 具体的な身につけ方 学習目標の背景 <u>典型例題学習の進め方</u></p> <p>第十六章：問題演習 <u>問題演習の目標</u> <u>問題演習のポイント</u> 問題演習における意識 具体的な様子 問題演習における注意点 <u>問題演習の進め方</u></p> <p>第十七章：数学総まとめ <u>数学勉強法の概観</u> <u>教材設定の具体例</u></p> <p>【結語】 <u>後書き：エピローグ</u></p>
---	---

【プロローグ】

前著『本当の勉強法を知りたくないか？』は、おかげさまで大変な好評をいただきました。当たり前の勉強法を、系統的に分析し直すという古くて新しい試みを、皆さんにご理解いただけたことを、心より感謝しております。

本書『英語・数学勉強法』は、『本当の勉強法を知りたくないか？』の姉妹書です。その名の通り、英語および数学の勉強法を扱うわけですが、掲げるポリシーは変わりありません。「楽なのにぐんぐん成績が上がる、魔法のような英語・数学の勉強法」といったような「まやかし」ではなく、「**当たり前かもしれないけれど、英語・数学の成績をきちんと上げる方法はこれしかありませんよ**」という嘘偽りのない勉強法に、誠心誠意をもって真正面から取り組むのです。

さて、ではなぜ『本当の勉強法を知りたくないか？』だけではなく、あえて独立して『英語・数学勉強法』も打ち出す必要があるのでしょうか。

実は、**極論的には『本当の勉強法を知りたくないか？』の一冊さえあれば、ありとあらゆる勉強法が解決できるはずだ**と思います。なぜなら、そこで扱った勉強法は、あらゆる科目や入試・資格などのジャンルを超越し、すべての勉強に通用するものだからです。それは、いわば、勉強法の「総論」であり、「幹から枝へ」という概念を拝借すれば、まさに「幹」に相当する内容であったのです。

一方、英語や数学の勉強法とは、各科目に標的を絞っているぶん、勉強法の「各論」、すなわち「枝」に相当する部分だといえます。すると、各論がどうのこうのという以前に、総論の内容を、現実の具体的な科目に適用・応用していただければ、それらは全て自ずと導きだされるものに違いありません。英語・数学はもちろん、資格試験も含め、どんな科目の勉強に関しても、本来それで十分なのです。

しかし、「総論の内容を、各自で科目に当てはめてください」と丸投げしてしまった場合、多くの方がその通りに正しく実践できるかという、疑問が残ります。口で言うのは簡単ですが、物事はそんなにうまくは運びません。やはり、そこには「お手本」となるべきものが存在したほうが、圧倒的に習得の効率が上がるのは間違いありません。総論の内容を頭に留めた上で、**具体的な科目の勉強法を眺めてみると、「ああ、なるほど。こんな感じで各科目に適用していけばいいのだな」という形で、楽に視界が開けてくるはず**です。

そこで、勉強のプロセスに「インプット」と「アウトプット」があるように、ただ抽象的な総論を提示するのみでなく、具体的な科目における実際の勉強モデルを、数例お見せする価値があるわけです。

その際、白羽の矢を立てる科目が、英語と数学になります。理想的には、皆さんが対峙する科目一つ一つに対し、個別に攻略していくことができればよいのですが、残念ながらそれは不可能です。入試の科目だけでも、国語・理科・社会とありますし、さらにその中

で現代文・古文・漢文・化学・物理学・生物学・・・と細分化されます。ましてや、資格試験なども考慮しようとするれば、各論としての「科目」は無尽蔵に存在します。これら全てを扱うのは無理な注文というものです。

そこで、最も汎用性があるだろうと考えられる科目に話を絞る必要があります。それが、すなわち**中学高校レベルにおける「英語・数学」という主要 2 科目**なのです。これらは、勉強法の各論が「枝」であると考えたとき、その「枝」の中でも、特に「太い枝」だといえます。その理由は、二つの観点から考えることができます。

第一に、**それぞれが文系科目と理系科目の代表格である**ということです。もちろん、英語が文系寄り、数学が理系寄りの科目であるということは言わずもがなです。

この双方を扱うことによって、バランスよく手広い「勉強法のエッセンス」をカバーすることができます。例えば、国語の勉強の仕方は、ほとんど英語と同じようなものです。物理学や化学は、ほとんど数学と同じような勉強法で対処できます。さらに、文系・理系、両者のエッセンスを適宜組み合わせることにより、その他の科目も全て対処できるようになるはずです。

周囲を見渡していただければ気付くと思うのですが、「英語は得意だが、数学は苦手」とか、逆に「数学は得意だが、英語は苦手」というタイプの人は多く存在します。しかし、「英語と数学は得意だが、他の科目が苦手」というような人は、めったに存在しません。これはすなわち、生理的にその科目を好きかどうかは別問題として、**英語と数学の両方で一定以上の成績を修められる人は、「どこでも通用するような勉強の仕方が身につけている」ということを表している**のです。そのような人は、入試におけるその他の科目はもちろんのこと、全く別ジャンルである資格試験の勉強や専門科目の勉強をする機会にも、いつも通りの勉強の仕方ですらいつも通りの好成績を修めることができるに違いありません。

第二に、**科目としての重要性のウェイトが高い**ということです。

まず、小学生レベルの科目では少し易しすぎるため、一般論として提供するには不足があります。また、大学以上のレベルや資格試験の科目となると、こんどは高度に専門分化されすぎていて、やはり一般化には向きません。その点、中学から高校にかけて必須で学ぶ科目ならば、ほとんどの人が共通して経験するものですし、難易度も最適です。つまり、**人生というスパンでみたとき、もっとも比重をかけて分析するに値する**のが、このレベルの勉強なのです。

そして、その中でも、英語と数学を選別したのは、とりわけこの 2 科目が成績に影響する割合が大きいからです。経験論的な話になりますが、普段から英語と数学さえ成績をそれなりにキープしておけば、受験において致命傷を負うことは、ほとんどありません。極端に言えば、英語と数学以外の科目は、日頃の成績が赤点連発であったり追試の嵐であったり、留年の危機に瀕するような出来であったとしても、どうとでもなるのです。

例えば、理科や社会などの他の科目は、その気になれば試験直前の数ヶ月とか、夏休み

からでもなんとか間に合わせられる可能性があります。最悪、1年間浪人でもすれば、勉強時間としては十二分に確保できるはずですが、しかし、英語と数学という中学高校における主要 2 科目は、積み重ねが大きくものを言う科目であり、絶対に短期間でのリカバーは利きません。この 2 科目を手抜きしていると、いざ、本人が受験を前にしてやる気になったときに、既に手遅れというケースがしばしばあるのです。

そのため、「少なくとも英語と数学だけはやっておけ」という助言は、やや邪道である感否めませんが、現実的に即した的確なものであると考えられます。この点に対応すれば、本書でも、この 2 つを扱うのが妥当な判断といえるでしょう。

取り扱う範囲は、英語・数学と一見限定的ですが、その恩恵は多くの人々が享受できるはずですが。

中学・高校生、英語資格を取ろうとする人、数字を扱う科目（簿記など）に携わる人などには、大いに役立つに違いありません。また、これに当てはまらない方でも、前述のようにエッセンスの組み合わせにより利用したり、ときには子を指導する教育者や親の立場から読んだりすることによって、きっと得るものがあると思います。

【第一章：勉強手法理論の確認】

＜勉強手法の理論＞

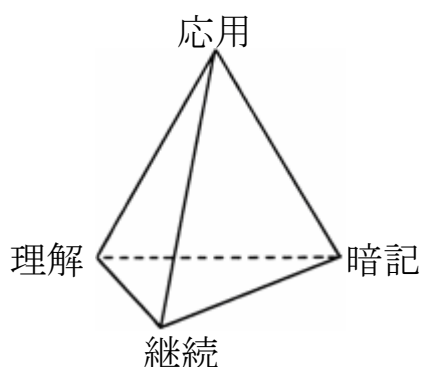
本書では、『本当の勉強法を知りたくないか？』で示した勉強法を前提として話を進めます。よって、以後の章にすんなり入っていくために、その必要最低限の内容だけは確認しておくことにしましょう。これにガチガチに従って英語・数学の勉強法を考えていくわけではありませんが、随所にその精神が活かされていますので、以後を読み進めていく上で意識的に照らし合わせてみてください。

- ・ 勉強法 x 軸
- ・ 勉強法 y 軸

〔勉強法 x 軸〕

勉強法は、勉強のプロセスに対応して考えていくことができます。それは、すなわち「**理解・暗記・継続→応用**」という形です。対象の内容の理解と暗記をし、それを達成するために継続し、その過程で一ランク上のプロセスである応用も身につけていくということこそが、勉強の基本骨格でした。

これを、各要素の相互関係も含めた概念図にすると以下のようになります。



前著『本当の勉強法を知りたくないか？』では、これを素にして、「理解法」・「暗記法」・「継続法」・「応用法」と銘打って、各種の勉強手法を解説しました。

本書に臨むにあたって、以上の内容は必須事項です。少なくとも、この基本骨格だけは押さえておくようにしましょう。もちろん、各々どのような手法論があったかを頭の片隅に入れておいた上で先に進んでいただければ、理想的です。

勉強の基本プロセスの一つは、「理解・暗記・継続→応用」である。

〔勉強法 y 軸〕

前項とはまた別の角度からみたプロセスもありました。それが、「**インプット→アウトプット**」というものです。

例えば、数学の勉強をするとき、「四則演算（足し算・引き算・掛け算・割り算）」などの数学のルールを、前提の知識として仕入れておく、すなわち「インプット」しておく必要があります。そして、その次に、「四則演算」のルールを用いる具体的な問題を解く、すなわち「アウトプット」することができ、それが実力養成へと繋がるのです。

「インプット」は教科書や参考書を読んだり、系統講義を聞いたりすることに該当し、「**武器の装備**」というイメージです。一方、「アウトプット」は、問題集を解いたり、模擬試験を受けたりすることであり、「**武器を使う練習**」というイメージを持っておくといいでしょう。

強い敵を倒すためには、強力な武器を持っていることと、それを十分に使いこなせることの両方が必要です。ですから、これら双方のバランスのよいレベルアップが不可欠なのです。

「インプット→アウトプット」のプロセスは、各々に対応して「インプット用教材」そして「アウトプット用教材」というように、適切な教材の選別にも役立てることが出来ます。本書でも、このような一面が活用されています。

もう一つの、勉強の基本プロセスは、「インプット→アウトプット」である。

【第二章：英語という科目】

＜英語の勉強＞

英語勉強法に入る前に、導入として、英語という科目の特徴について概説しておくことにします。

英語に関しては、苦手意識のある人も多いと思いますが、悪趣味な自己啓発のごとく「英語は楽しい！」などと一方的に主張するのも意味がありません。そこで、客観的な事実から考察して、そのような気持ちを少し和らげる一助としたいと思います。

それは、なんとといっても**英語は、世の中でも「最も簡単な言語」のうちの一つである**ということです。周知の通り、英語は世界で最も広く通じる国際語です。どうして、英語がこれほどまでに普及しているのでしょうか。

もちろん、そこにはいくつかの理由があります。例えば、世界史における政治経済の覇権を握ってきたイギリスやアメリカの影響力は、確かに非常に大きなものでしょう。しかし、決して無視できない大きな要因として、「英語が簡単な言語である」という事実があります。

まずは、**基本的な使用文字の数が最も少ない部類に入ります**。アルファベットは僅か 26 文字しかありませんが、日本語となると、漢字・ひらがな・カタカナとあわせて 2000 文字近くを駆使できなければなりません。その代わり、英語ではスペルと発音が一致しないという欠点がありますが、それでも差は歴然としています。日本語以外の言語と比べても、この使用文字の少なさは際立っています。

また、**その表現や文法の単純さも特徴的です**。その分、情緒あふれる文章や深みのある表現技法は少なくなってしまうかもしれませんが、英語を学ぶ外国人にとっては、これは大変有難いことです。英語にも十分な奥深さはあるのですが、少なくとも、初学者にとってこの敷居の低さは特筆すべきものです。英語を母語とする人は、第二言語として英語より難しい言語を学ばなければいけないのが普通ですから、この点では、第二言語として英語を学べる我々の方が幸運だとも考えられるのです。

さて、英語は、科目としては「語学」の中に分類されます。すなわち、母語以外の言語を学ぶことです。ただし、一般人レベルで英語を学ぶことを、はたして**厳密な意味で「学問」と呼べるのかどうかは微妙なところ**です。

なぜなら、言語の勉強はあまりにも「不確実性」が高いからです。これは数学などと比較すれば明らかなのですが、もうそれは「例外事項」のオンパレードです。一応、文法をはじめとする一定のルールや決め事はあることにはありますが、「そもそも、どうしてそんなルールになったのか」という疑問は解決しませんし、さらに、そこから逸脱する表現や言い回しはいくらでも存在します。人が用いる言語とは、まるで生き物のようなもので、時や状況に合わせて千変万化するのです。

ですから、数学のように、一切の例外が存在せず、全ての事実がシステマチックな関係

性をもって構築されている、いわゆる「完璧に系が閉じた学問」とは、似ても似つきません。

「言語の習得は、勉強ではなく単なる体験だ」という言葉があります。もちろん、多少言い過ぎの感はありますが、それなりに含蓄があることは確かです。実際、ネイティブスピーカー達は、仮にどんなに地頭が悪い人間でも、日常的に英語を使っています。つまり、理屈の上では、英語の学習者も**頭の良し悪しに関係なく、その習得が不可能なはずはない**のです。

どんなに他の科目の勉強が不得意でも、「英語だけは、誰でも絶対にできるようになる」と思っておきましょう。「学問」をやるように鯨張らずとも、正しいやり方で触れ合っていれば、英語は必然的に上達するものなのです。

以上が、主だった英語の特徴になりますが、このように「簡単」で「学問的というより経験的」といった部分を捉えて、**様々な「英語勉強法」が世の中に出回っていることが問題**です。つまり、真偽を証明する手立てがないため、「言いたい放題。なんでもアリ」の世界になってしまっているのです。例えば、「この教材を使うだけで、3日で英語が得意に！」といった胡散臭いものから、「教科書を丸暗記せよ！」といったハードなものまであり、学習者はいったい何が正しい情報なのか混乱してしまいます。

英語に臨むにあたって、このような玉石混交の情報に惑わされないために、まずは**英語勉強法を見透かす「眼力」を養っておく必要があります**。そうすれば、本書で提言する英語勉強法も自ずと導き出されてきます。次節からは、これを紐解いていくことにしましょう。

英語の特徴には以下のようなものがある。

第一に、世界で最も簡単な言語のうちの一つである。

第二に、厳密な意味では「学問」というかしまったものではなく、適切に触れ合っていれば必ず上達するものである。

ただし、玉石混交の英語勉強法に惑わされない眼力を養っておく必要がある。

<英語勉強の構造>

英語勉強へのアプローチにどのようなものがあるかを語る前に、英語が上達していく過程や、その目標についての前知識が必要です。

- ・ 英語習熟の段階
- ・ 見据えるべきゴール

[英語習熟の段階]

「文法ばかりできて、日常現場で使えない英語の勉強など無意味だ！」とか、「いや、本

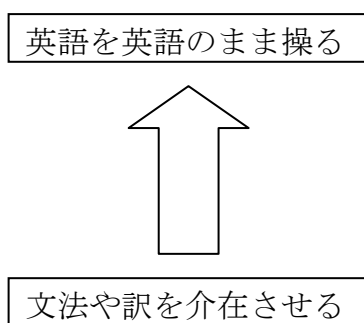
当に使える英語を身につけたいのなら、文法こそ必要だ！」というような激しい論争は、しばしば巷で繰り広げられています。英語勉強の初心者は、両者の狭間で右往左往してしまい、ときに道の選択を誤って大変な後悔をすることがあります。

どんな英語勉強法を最終的に採用するかは、最終的には個人の自由ですが、それは正しい情報を与えられた上で判断すべきものです。偏った美辞麗句をかじったぐらいで、怪しい勉強法に飛びつくのは賢明ではありません。

そのため、まずは「英語が上達する」という過程が、どのような構造を持っているかを明らかにしておく必要があります。そこから、各種の英語勉強法が、どういった形で「英語の上達」へアプローチしようとしているのかを把握することによって、それらのコンセプトを正しく理解することができるはずです。

では、さっそく「英語の上達」の段階の解説をしましょう。これには二つの段階があります。一つは、「文法や訳を介在させる」というもの、そしてより上級レベルに位置するのが「英語を英語のまま操る」というものです。

まずは、この構造を図示しておきます。



さて、「文法や訳を介在させる」とか「英語を英語のまま操る」といった段階は、どのような状態なのでしょう。「This is a dog.」という例文で様子を見てみます。

通常、一般的な非ネイティブが「This is a dog.」という文をみたら、一旦は「これは犬です」と和訳をします。**和訳をすれば、それは母語ですから、意味がわかるはずです。**この刹那、頭の中では以下のようなイメージをすることができるはずです。



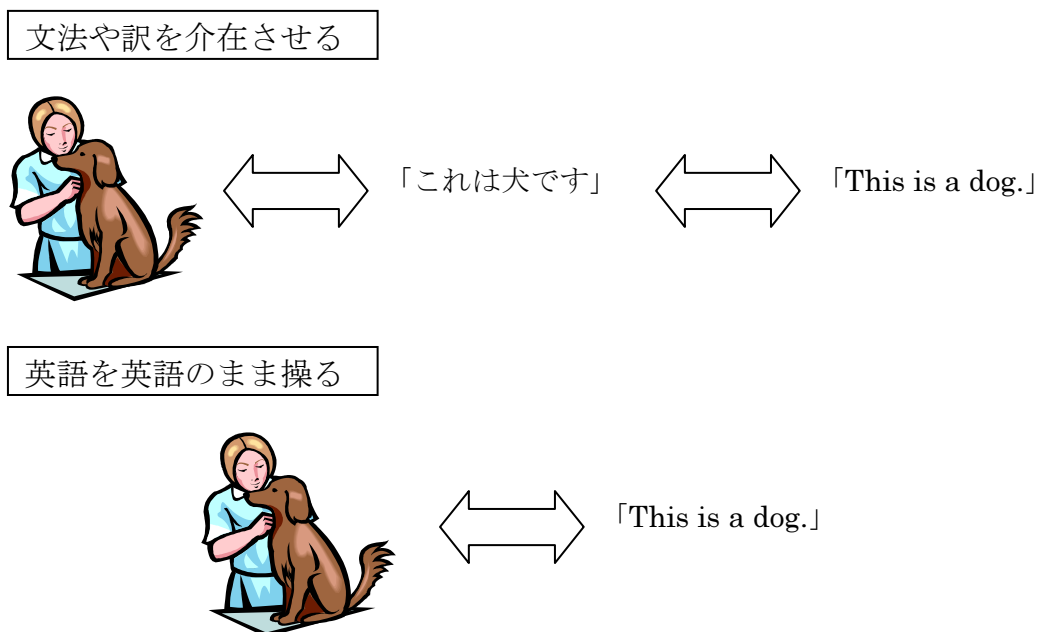
これこそが、「This is a dog.」という英文を理解した瞬間になるわけです。当然、逆も然りで、「これは犬です」と言いたいと思ったら、それを英訳する形で英文に直します。なお、

「訳」をする際には、文の正しい構文や修飾の関係性などの解析が必要ですから、必然的に「文法」も利用していることとなります。

これに対して、「英語を英語のまま操る」とは、この訳が間に介在せずとも、「This is a dog.」という英語をみたら、すぐに直接このイメージを想起することができるし、その逆もできるという状態です。

これは**丁度、ピアニストが曲を弾く状況に似ています**。音符をみて、いちいち「この音符はドだから、押すのはこの鍵盤」とやっていると、とても曲になりません。「ドの音符をみたら既に指がドの鍵盤を押している」という状態でなければなりません。当然、**正真正銘のネイティブ達はこのようにして英語を操っている**わけです。

最後に、以上の内容をまとめた図を掲載しておきます。

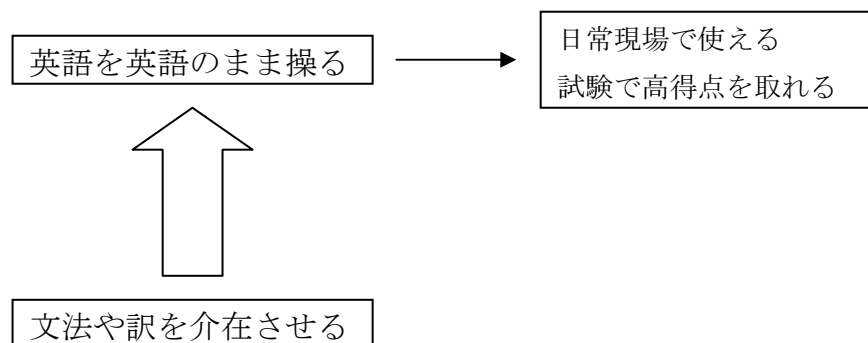


英語を習熟するには、二つの段階がある。一つは「文法や訳を介在させる」というものであり、もう一つは「英語を英語のまま操る」という上級レベルのものである。

〔見据えるべきゴール〕

前項にて、英語習熟の二段階がわかりました。ここで、**最も重要なポイント**は、「英語を英語のまま操る」というレベルに達して初めて、「日常現場で使える英語」や「試験で高得点を取れる英語」になるということです。

この概念を含めた上で、改めて図を掲載します。



前項の内容から明らかな通り、「文法や訳を介在させる」ことの致命的な欠点は、「時間がかかる」ということです。「This is a dog.」のような簡単な一文だけなら、まだその差は小さくて済みますが、これが長い文章になってくると、トータルでは相当な時間差がでてきます。

特に、英語と日本語では、本来的に語順が異なりますから、それを並べ替えるという作業が不可避です。よって、ちょっとでも文章が複雑になってくると、かなりの時間がかかってしまうのです。いくら「**文法を解析し、訳をする**」ということ**自体のスピードが向上しよう**と、**余計なワンアクションが追加されている以上、「英語を英語のまま操る」には、絶対に敵いません。**

これは、時間が無制限にある条件下なら、そこまで大きなデメリットを生じないかもしれません。例えば、英語の論文を何時間もかけて解読するとか、自由に時間を使って英語の手紙を書くという場合、不利益はあまりおこらないはずですが、**決定的に問題が生じるシチュエーション**が存在します。

まず、一つは「**コミュニケーションをするとき**」です。これは想像に難くありません。人の話を聴くとき（リスニング）、人に対して喋るとき（スピーキング）に、いちいち自分の中の考えと英文の間に「文法や訳を介在させる」という作業をしていたら、円滑なコミュニケーションなど、とてもできるはずがありません。典型的には、言われたことや言いたいことを頭の中で一生懸命考えているうちに、「…」という沈黙が流れてしまい、いわゆる「**試験問題は解けても、コミュニケーションができない人**」になってしまうのです。これは、英語学習者の本望であるはずがありません。

もう一つは、「**試験で高得点を目指すとき**」です。実は、これがかなり多くの人の盲点になっています。「自分は英語で外国人とコミュニケーションなどするつもりがないからいい」という悔し紛れの現実逃避をする人がいますが、前述のようなコミュニケーションよりも以前の問題として、オーソドックスな試験においても、「文法や訳を介在させる」というやり方一辺倒では、もはや全く通用しないのです。

なんととっても、昨今は、リスニングやスピーキングなどのコミュニケーション系問題

を積極的に取り入れた試験が増えてきました。さらに、王道のペーパーテストでも、非常に長い文を読み書きさせ、一つ一つの文章に長々と時間を割いてられないような問題が著明に増加しています。「文法の解析や訳をすること」それ自体を目的とし、その完成度の高さを競うことが多かった古典的な問題は姿を消し、とにかく素早く英語を操る作業がますます求められるようになってきているのです。英語の資格試験ともなると、その傾向はさらに顕著です。

これらは、一重に、試験を主催する側も「現場で使える英語」に近い形での英語の実力を試したいからに他なりません。「英語の試験が時間内に終わらない」という人は、確実に「英語を英語のまま操る」という作業の習熟が足りていないと考えてください。決して「訳をするのが遅いから」ではないのです。

以上より、「日常現場で使える英語」や「試験で高得点を取れる英語」を目指すには、「英語を英語のまま操る」ということが、必須の到達目標であることがわかります。

もちろん、これは簡単なことではありませんから、その達成度は個人により差があると思います。しかし、**少なくとも英語の勉強をする人全員が、「それが理想のゴールである」と知っていることが大切**です。仮に見積もりを間違ってしまったが最後、その人の実力の伸びは確実に抑えられてしまうからです。

「文法や訳を介在させる」レベルでは、どうしても時間がかかるという弱点がある。日常現場や試験において存分に通用する実力をつけるには、「英語を英語のまま操る」というスキルが必要不可欠であり、これこそが英語学習の理想的なゴールである。

<英語勉強のアプローチ>

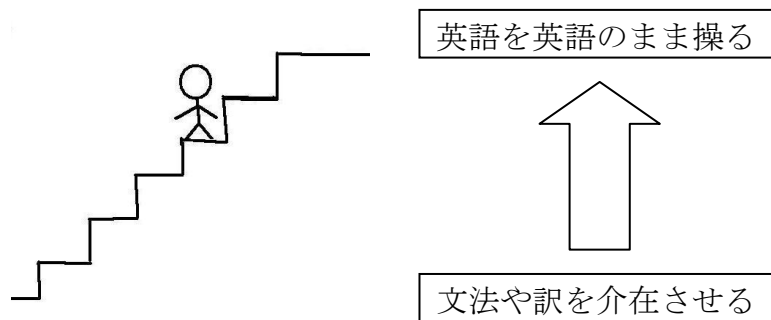
前節で英語学習の正しいゴールがわかりましたが、それに対してどのようにアプローチするのかによって、世の中には大きく分けて二つのパターンが存在します。

- ・ クラシック型アプローチ
- ・ ネイティブ型アプローチ

[クラシック型アプローチ]

本項で扱うのは、二大アプローチのうちの一つ、「**文法を学び、単語・熟語を暗記し、英文和訳・和文英訳でトレーニングを積む**」という昔ながらのやり方です。ここでは、これを「クラシック型アプローチ」と呼ぶことにします。

つまり、英語成熟の二段階を、正直に下から順番に登っていきこうというわけです。以下の図でイメージしてください。



クラシック型の最大の利点は、英語の実力を伸ばす時間を短縮できることです。文法学習や単語・熟語の暗記から手をつけるという面倒な手順からすると、**一見逆のように感じられるかもしれませんが、実際には上達のスピードが最も速い**のです。

ネイティブの人達は、生まれた瞬間から英語を使い始めています。本来、彼等が長い年月をかけて身につけてきたものを、たかだか数年でそれなりに使えるレベルにまで引き上げようとする自体が、ある意味「ずうずうしい試み」といえます。しかし、その願いをかなえるために**先人達の英知を結集したものこそが、文法であり、出現頻度の高い単語・熟語の集中的学習、そして訳の訓練**に他なりません。

比較的短い時間で英語の実力を上げるためには、無駄な回り道なるべく省き、最短のコースを突っ切る必要があります。その際、数多ある英語表現の中から、共通項や対比事項を抽出し、系統的にまとめ挙げた「文法」は、大変有効な助っ人となります。例えば、「SVC」という文型を学べば「I am a student.」、「He is mad.」…と、同じ型が適用されるあらゆる文章を一度に掌握することができます。限られたルールだけで、英語に必要とされる全ての文章の組み立てや、使われ方を網羅してくれるのです。

ネイティブは、長い月日をかけて生活の中で文章と触れ合うことで、このような全ての文の形式や用法を、無意識に身につけていきます。しかし、我々のように習熟期間が短い場合は、同じやり方をしても、その達成は非常に不確実になってしまいます。文法を学ぶことによって、知識の漏れがなくなり、英語を学ぶ効率性も上がり、この問題点をクリアすることができるのです。

単語や熟語の学習も同様です。一万語とか二万語もの語彙をすぐに覚えてしまえるのなら、確かに学ぶ順番はどうでもいいかもしれませんが、実際にそれは不可能ですから、どうせ学ぶなら使用頻度の高いものから手をつけるほうが得に決まっています。そこで、「頻出の 2000 個を掲載した単語帳」、「頻出の 1000 個を掲載した熟語帳」といったものに、利用価値が出てくるのです。

冒険をするとき、全く道しるべがなくても、あちこちに間違った方向へ行っても試行錯誤しながらゴールに辿りつくこともできますが、経路の指針が示された地図を持たせてもらう方が楽なのは当然です。**英語学習において、文法・語彙を学び、訳の訓練をするという**

ことは、ちょうど「地図を持たせてもらう」ということに等しいのです。

また、**現実的な利点として、クラシック型は「試験に強い」ということも挙げられます。**

最近、試験形式の潮流も変化しつつありますが、ペーパーテストが主体の試験形式では、依然として文法問題や訳問題が出題される傾向が根強く残っています。将来、その役割が多少減ずることはあっても、決してゼロになることはないでしょう。よって、そのような試験に臨む際には、得点の上昇という結果につながりやすいことは確かです。

逆に、クラシック型の欠点は、**「文法や訳はできるが、実践の場では使い物にならない英語の勉強」をするような人がどうしても出てきてしまう**ということです。

本来は、そのような顛末を期待しているわけではありません。先に掲載した図に改めて注意していただければわかると思いますが、スタート地点は「文法や訳を介在させる」であっても、あくまで英語学習のゴール地点は「英語を英語のまま操る」であることを忘れてはいけません。最初はいちいち訳をしていたのが、研鑽を積むことによって「反射的にできるものが増える」、すなわち「訳」という媒体を取り払ってしまえるまでに上達することが期待されているのです。

文法や頻出語彙、訳などを集中的に学ぶことは「冒険の地図を得ること」ではあっても、「冒険をクリアすること」ではありません。ですから、それらの勉強の結果が、「文法や訳をする」という作業に終始することはあってはならないのです。

しかし、残念ながら、そこまで英語をやり込む律儀な人は、非常に限られているのが実情です。結果的に、クラシック型アプローチは、日常現場や分量の多い試験で通用する英語を身につけられない人を、多く生み出してしまうという問題点を孕んでいます。

クラシック型アプローチは、「文法を学び、単語・熟語を暗記し、英文和訳・和文英訳でトレーニングを積む」という昔ながらの英語学習法である。これは、比較的短い期間で、穴なく英語の実力つけることができ、一般的な形式の試験に強いという利点がある。一方、ゴール地点を見誤ってしまうと、実戦の場で通用する英語は身につかない。

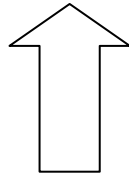
[ネイティブ型アプローチ]

もう一つの、代表的な英語勉強のアプローチは、「**ネイティブが英語を体得したのと同じように、多くの英語に曝露されることによって英語を学ぶ**」というやり方です。ここでは、これを「ネイティブ型アプローチ」と呼ぶことにしましょう。

まずは、以下の図でイメージしてください。英語学習のゴールである「英語を英語のまま操る」という段階へ、直接降り立とうというわけです。



英語を英語のまま操る



文法や訳を介在させる

ネイティブ型では、系統的な文法講義や面白みのない単語や熟語の暗記、そして訳といった作業を中心に据えることはしません。ごく一般的な英語の文章を、とにかくたくさん読み、聞き、そして自分もそれに合わせて音読したり、話したり、書いたりします。文法的なルールや各種の語彙は、文章の中で出会った順に学んでいくという方式をとります。

ただし、このネイティブ型アプローチは少し曲者であり、さらにその中で**ニュアンスの異なる二つの考え方**があります。それらをきちんと区別しておかないと、議論が混乱する原因になります。ここでそれらを分類しておきましょう。

- ① ネイティブの真似事
- ② 英文をひたすら復唱する

まず、①です。これは、ロクな苦勞もせずとも、英語と親しんでいれば、いつのまにか簡単に英語が上達するという主張になります。「ある種のやり方や教材を用いれば、いままでの苦勞が嘘のように、魔法のごとく英語が得意になる」といった宣伝文句のものも、通常は「(面倒な)クラシック型ではない」ということを売りにしていますから、これに準じると考えてよいでしょう。

しかし、**こちらは、ほとんどが「庶民を餌食にするインチキ」に該当する**と考えてください。世の中には、「ある日突然、英語がペラペラに！」とか、「英語は勉強なんかしなくてもできるようになる」と誘惑しておきながら、つゆほどにも効果がない教材が溢れています。誰もが、「苦勞しないで英語ができるようになりたい」という本音を持っているからこそ、そのような罠に嵌められてしまうわけですが、決してそれらに引っかけあってはいけません。

実際、本当に英語ができる人で、「裏技のような英語勉強法のおかげで、今のようになれました」という人は絶対に存在しません。彼等は相応の努力をして、その実力を手に入れたはずです。「虫のいい話」を簡単に信用してはいけないということは、今も昔も変わらぬ

訓戒です。

また、言語学者の中では常識なのですが、幼少期に英語を母語とせず育った**非ネイティブである限り、「ネイティブの真似事」をするだけで言語の会得をするのは、はっきり不可能とされています**。この厳然たる科学的事実から目を背け、楽な方に流されるのは、結果的に時間・労力・お金の無駄使いに終わることは間違いありません。

ただし、①の主張が全くもって無意味というわけではありません。これが、**有意義な状況とは、主として「英語学習者が十分に幼いとき」**です。昨今は、小学生以下の年代から、早期のうちに英語教育を開始する気運が高まっています。このような幼い子供達に、ガチガチな勉強をさせるというのもナンセンスな話です。まだまだ頭の柔らかい彼等に対しては、完璧な環境ではないかもしれませんが、ネイティブと同様のアプローチを適用する価値が十分にあるでしょう。

また、学習者が既に幼くない時点でも、**「英語を楽しむ、英語と触れ合う」という観点から、補助的にこの観点を利用するのであれば、もちろんそれは有効**です。どんなときも、根を詰めて英語の勉強をしなければならないという道理はありません。「そこまで気合を入れる必要性はないけれども、なるべく英語と触れ合っておきたい」といったようなとき、そこに「英文」が存在しさえするのであれば、如何なる形式の教材も全く役に立たないということはありません。

以上のように、①は、それ単独では根本的な実力の底上げには力不足かもしれませんが、潤滑剤としての役割は十分に果たしてくれるはずです。

次に、②です。こちらは、①に比べると**ずいぶんストイックな方法ですが、確実に効果がある**ということが経験的に知られています。

やり方は、単純明快です。**質のよい英文を、内容を理解した上で、飽きるほどに声に出して暗唱するという作業をすればよい**のです。具体的な教材としては、「英文集の丸ごと暗唱」ですとか、「教科書の英語長文の丸ごと暗唱」、それから「リスニング教材のスク립トの丸ごと暗唱」といったことをします。

前述した通り、①のように「ネイティブの真似事」をするだけでは、非ネイティブが充実した英語力を手に入れることは困難です。しかし、②では圧倒的な反復トレーニングを行うことで、人為的にその壁を乗り越えてしまおうというわけです。

もちろん、世の中に存在するありとあらゆる文章を暗唱しきることは不可能です。しかし、一定レベルの一定量の英文に対してこの作業を行うことにより、少なくとも「英語を英語のまま操る」という英語学習のゴールへ向けて、確実な足がかりとすることができることは間違いありません。

実際、中学生レベルの初歩的な典型英文の暗唱ができるようになれば、それだけでも結構な実力になる上、日常会話に対する抵抗感も大幅に減少します。むしろ、学習段階に合

わせて、順次暗唱する英文のレベルも上げていけば、安泰な英語の実力が保証されるでしょう。

非ネイティブでありながら、とても上手な英語の使い手である人の多くが、これに準じる訓練を積んでいることは確かです。例えば、有名な例では、18カ国語を流暢に操ったとされる、ドイツの考古学者シュリーマンが挙げられます。彼は文法の学習を一切せずに、多量の文を丸暗記することで、この域に達したとされています。**非ネイティブの英語学習者が、決してインチキなやり方ではないネイティブ型アプローチを採用したいと思ったとき、その主要な方法としては、一見注目が集まりがち①ではなく、②こそが王道であると考えてください。**

以上が、ネイティブ型アプローチ2種の概要です。①・②のいずれにせよ、ネイティブ型の利点および欠点は、ちょうどクラシック型のものと逆になると考えていただければ問題ありません。

なんといっても、ネイティブ型の**最大の利点は「英語を英語のまま操る」という目標と相性が良い**ということです。クラシック型では、本来のゴールは一緒のはずでも、しばしばその目標を見失い、不完全なまま勉強が終わってしまうわけですが、ネイティブ型アプローチを意識している限りは、そのような問題は起こりにくいはずで

逆に**欠点は、生半可な学習では穴や偏りができてしまう可能性が高い**ことです。例えば、「本当は頻出事項なのに、自分がたまたま見たことがなかったから、わからなかった」という問題に試験で出くわしてしまったり、緻密な文法的知識が要求される設問を落としてしまったりしやすい傾向にあります。この点では、「肝どころ」から押さえているクラシック型に引けをとります。

ここまでで気がつくと思うのですが、**ネイティブ型で英語をマスターするのは、実はクラシック型に勝るとも劣らぬ大変な道**なのです。シュリーマンは頭がよかったから簡単に実現できたかもしれませんが、一般人が全く同じことをやれるとは限りません。事実、同様の方法を試みたはいいけれど、結局挫折してしまったという人も多くいるはずで

ネイティブ型は、「英語学習のゴールを誤らない」という点で素晴らしい存在意義がありますが、「これで楽に英語が習得できる」というわけでは決してないのです。

ネイティブ型アプローチは、「多量の英語に晒される」ということを中心に据える英語学習法である。これには、厳密には以下の二種類がある。

第一に、ネイティブの真似事をする。ただし、英語学習がこれだけで済むことは稀である。

第二に、ストイックに英文を復唱する。これは、如何なる場合でも確実に効果がある。

ネイティブ型は、「英語学習のゴールを誤らない」という利点がある。一方で、生半可なやり方では、穴や偏りのある英語の実力しかつかないという欠点がある。

<本書のスタンス>

英語勉強のアプローチについておわかりいただいたところで、本書としてどのようなスタンスで英語勉強法を解説していくのかを説明します。

結論から言うと、クラシック型とネイティブ型どちらか一方の肩を持つということはありません。というより、むしろ、片方だけの味方をしてしまった時点で「その英語勉強法は間違いである」とすらいえます。「どちらが正解でどちらが間違いだ」と断ずるのは、センセーショナルに勉強法を盛り上げて、素人を餌食にするにはもってこいかもしれませんが、正統派の勉強法を探るという意味ではナンセンスです。

前述したように、クラシック型・ネイティブ型のアプローチは、それぞれにメリットとデメリットがあります。どれか一つに凝り固まるのは、優れた作戦とはいえません。例えば、クラシック型のみで勉強したために実戦力不足な人、純正ネイティブ型①のみではほぼ効果がなかった人、ネイティブ型②のみで「教科書丸暗記」を試みて挫折した人…これらは、いずれもアプローチとしては失敗しています。

効率よく理想的な英語の実力をつけたいのなら、物事の真理はとてもシンプルで、「バランスが大事」ということに尽きます。なるべく効率よく英語の成績を上げるにはクラシック型に一日の長がありますし、一方で、もう少し長い視点で実戦的な力をつけるには、ネイティブ型の視点も決しておざなりにしてはいけません。

実際、クラシック型とネイティブ型は、互いに排他的な仲の悪い者同士というわけでは、決してありません。本当に素晴らしい英語の実力の持ち主ならば、クラシック型でやってきた人であっても、最終的にはネイティブ型の訓練を積んでいます。逆に、ネイティブ型で勉強をスタートした人も、文法的な裏付けはきちんと把握しているはずです。

つまり、**自分の好みに合わせてどちらか一方に軸足を置きながらも、他方の優れた部分も取り入れて、長所と短所を補完しながら両者を利用する、いわば「ハイブリッド型アプローチ」こそが、ベストの選択**なのです。

しかし、綺麗ごとだけ述べているだけでは、「では具体的にどうすればいいのか」と途方に暮れる人も多いと思います。そこで本書では、前述の「ハイブリッド型」というコンセプトを踏まえた上で、**「クラシック型に軸足を置き、ネイティブ型（主に②）を絡める」という形式**を進めていきたいと思います。これにはいくつか理由があります。

第一には、勉強法に説得力を持たせるためには、系統的な解説をする必要があるからです。ネイティブ型は、究極的には「英語とたくさん触れ合ってください」ということだけになってしまいます。それは、ネイティブの子供が「英語と触れ合う方法論」など存在しないのと同様です。よって、基本の軸足を置くには、クラシック型のほうが向いているというという便宜的な面があります。

第二に、「最も効率よく成績を上げる」という視点を、重視する必要があります。一口に英語の勉強といっても、人によって様々な目的があると思います。純粋な受験勉強から教